
議 事 要 旨

議 題：第9回 エキサイトよこはま22 懇談会

開催日時：平成30年5月24日（木）17：00～19：00

場 所：横浜アイランドタワー 10階 大会議室

参 加 者：委員名簿参照

1. 開会

- 事務局より挨拶
- 委員及びオブザーバーの紹介

2. 横浜市あいさつ

○平原委員（横浜市 副市長）

横浜駅周辺のまちづくりに当たっては、これだけ多くの方の協力を得ながら進めている。これだけ大きな会議体になっており、改めて深い御礼を申し上げたい。

今、横浜市では、新たな中期4か年計画の素案を作り、パブリックコメントを実施している最中である。その計画の中で、「人が、企業が集い躍動するまちづくり」という大きな戦略の柱を1本立てており、その中でエキサイトよこはまについても、国際都市横浜の玄関口にふさわしいまちづくりをしようという位置付けを変わらずしているところである。

横浜駅周辺を見ると、昨年9月には鶴屋橋の架け替えが無事終わった。工事期間中は皆様に迷惑をおかけしたが、今は安全に歩行者の流れが確保できている状況である。また、10月には国家戦略特区で事業をしている、きた西口鶴屋地区市街地再開発事業の組合設立の運びとなった。加えて、本年3月、暫定形ではあるが、JRの中央通路と西口地下街の連絡通路が仮の形でつながった。こうした形で具体的に事業が着々と動き出している。横浜市としても、引き続き、積極的に横浜駅周辺のまちづくりを展開していくつもりであるため、引き続き、協力をいただければと思う。

今話したような昨年度の動き、それから、今後の取組について、これから紹介させていただく。忌憚のない意見をいただきつつ、横浜駅周辺のまちづくりにつなげていければと思っているため協力をお願いしたい。

3. 議題 資料説明（事務局）

- 主な取組と今後の検討事項
 - (1) 横浜駅周辺を取り巻く状況【資料1】
 - (2) 西口周辺【資料1】
 - ・中央西口、きた西口駅前

- ・西口地下街中央通路接続事業（馬の背解消）
 - ・鶴屋橋架け替え工事 みなみ西口駅前
 - ・（仮称）横浜駅西口開発ビル
 - ・国家戦略特区（きた西口鶴屋地区）
 - ・観光バス対策
- (3) **東口周辺【資料1】**
- ・東口基盤整備の検討状況
 - ・横浜駅東口地区（ステーションオアシス）
 - ・東口駅前広場エスカレーター
 - ・ペイクォーターウォーク屋根設置
- (4) **治水対策【資料1】【資料2】**
- ・治水対策（外水・内水対策）
 - ・横浜市特定地域都市浸水被害対策事業
- (5) **まちづくりガイドライン【資料1】【資料3】**
- ・「まちづくりガイドライン」の追加・修正
- (6) **防災・エリアマネジメント【資料1】**
- ・防災の取組
 - ・エリアマネジメントの推進
 - ・公共空間の活用によるまちの賑わいづくり
 - ・その他
- (7) **今後の進め方【資料1】**

4. 意見交換

○鳥居委員（横浜駅西口振興協議会 会長）

常日頃から、関係者の多大なる協力に感謝している。横浜駅周辺では、昭和30年代半ごろから工事が続いており、日本のサグラダ・ファミリアとも言われているが、本年3月に馬の背解消による通路が仮ではあるが開通した。まだまだ途中ではあるが、御礼を申し上げる。

我々の事業の継続、発展のためには、駅周辺がにぎわい、街の魅力を上げていくことが重要であり、そのために様々な取組を進めることが必要である。そのため、我々事業者もエリアマネジメント組織を立ち上げ、様々なイベントを展開するなど、街としてのにぎわいづくりに取り組み、その成果も出ていると思っている。

まだまだバリアフリーには程遠い道路や建物の老朽化などの課題はあるが、エキサイトよこはま22も10年の節目を迎え、原点に立ち回り横浜駅周辺のグランドデザインをもとに、資金面への支援など、民間再開発のやりやすい環境を整えていただくこともお願いしたい。

○平原委員（横浜市 副市長）

馬の背解消の話があったが、今までは縦方向横方向にかなりクロスする状況であったが、少し改善の様子が見えてきていると現場を見て思っている。

○事務局（池本理事（横浜市都市整備局 横浜駅周辺等担当理事））

バリアフリーは大事だと思っている。エレベーター等の整備だけでなく、道路も含めて抜本的に再開発を行うなどにより改善することもあるかと思う。引き続き、よろしくお願ひしたい。

○小谷委員（横浜駅東口振興協議会 会長）

近年、みなとみらい21地区において事業計画が次々と発表されており、ますます横浜駅の利用者の増加が見込まれる。横浜駅周辺の発展のためには、東西はもちろんのこと、みなとみらい21地区との結びつきの重要性が高まっている。

西口では、駅ビルや鶴屋橋など、まちづくりが目に見える形で進んでいる。東口では、駅前広場エスカレーターの整備など、東口基本構想を基に民間開発と連携した基盤整備に向けての取り組みが進められている。地域の声十分に耳を傾けていただき、横浜の玄関口にふさわしい魅力あるまちづくりをお願いしたい。また、東西の振興協議会が協力し、国内はもとより海外からも多くの方に来ていただけるよう取り組む必要があると感じている。

○平原委員（横浜市 副市長）

ここ数年、みなとみらい21地区の開発が進んでいる中、東口の重要性もますます増してくると思っている。回遊性を高め、魅力あるまちづくりに我々としても引き続き取り組んでいきたいと考えている。

本日の朝刊にも出ていたが、都心臨海部における多彩な交通について民間からの提案を受け、これから実現に向けた協議を進める段階となっている。こういった交通のことなども考えながらまちづくりを進めていきたいと考えている。

○倉知委員（鶴屋地区街づくり協議会 理事長）

鶴屋橋が完成し、地元や利用者は本当に良かったと思っている。鶴屋地区街づくり協議会では、エリマネ組織を目指して、鶴屋橋をきれいに保つための清掃活動や防犯パトロールを開始するため、勉強会を行っているところである。

この懇談会の初回から同様のことを申し上げているが、資料1の10ページで挙げられているきた西口駅前広場の整備の中で少しでも河川上に蓋かけ又は隅切り形状の歩道整備はできないものか。横浜駅が日本一住みやすい街、駅に選ばれ、将来的にも期待をされている方は多いと思う。そうした中で今のままで良いのだろうか。今やらずに30年後、50年後に禍根を残すかもしれないということをどう考えるのか。

2点教えていただきたいのだが、1点目は、蓋かけや隅切り状歩道が難しい根拠を教え

ていただきたい。2点目は、平成16年の台風で水害があったことを受け、帷子川の堤防にアクリル板が設置され嵩上げされているのだが、鶴屋橋の工事の影響なのか鶴屋橋の周辺でアクリル板の設置が止まっている。その部分は今後どうなるのか。

○事務局（池本理事（横浜市都市整備局 横浜駅周辺等担当理事））

きた西口駅前広場の整備においてできる限り歩道空間を確保する。鶴屋橋の開通に伴い交通規制を変更したため、荷捌き等以外の車両の通り抜けがなくなったことから、歩車道の一体利用についても検討している。現在の喫煙所の空間も活用し、広く使えるようにしたいと考えている。また、東京ガスの変圧器も移設する方向で調整を進めている。

河川上部の蓋かけについては、治水上の課題があり難しいと聞いている。きた西口駅前広場については十分にゆとりのある空間ではないが、少しでも広く使えるよう、引き続き検討していく。

○大島委員（神奈川県県土整備局 河川下水道部長）

河川上部への蓋かけについては、治水上の問題で困難である。河川を横断する占有はあり得るが、縦断的に占有することは護岸の補修が難しくなるため許可できない。これは、全国的にも同様の判断だと思うので、ご理解いただきたい。

アクリル板については、鶴屋橋の工事の関係で50mほど設置できていない区間がある。平成30年度は予算確保ができていないため設置は難しいが、必要性は感じているため、平成31年度以降に設置していきたいと考えている。

○倉知委員（鶴屋地区街づくり協議会 理事長）

状況については理解ができたが、河川上部の蓋かけについては、何とか知恵を絞って将来的に設置できるよう、引き続き調整をお願いしたい。

○千原委員（横浜駅西口振興協議会 副会長）

資料1の14ページで挙げられているみなみ西口駅前の再整備については、市に尽力いただいた結果、目に見えてごみも減り、改善した。地元としてもこの環境を維持し、維持管理を続けていきたいと考えている。さらに、2020年に向けて9ページ、10ページで挙げられている駅前広場の整備が実現すれば、横浜駅を利用する来街者にとって非常に利用しやすい駅前広場になるため、色々なイベント等を定期的に行うことができるようになれば、更に街のにぎわいにつながっていくと考えている。

一方で、有意義な公共空間を適切に維持管理しながらエリアマネジメント活動を持続可能にするためにはコストがかかるため、公共空間を使った広告や物販、イベント等による収入を活動や維持管理の原資に充てられるような規制緩和についてもお願いしたいと考えている。

18ページ、19ページで挙げられているような観光バス対策については、インバウンド対策にもなると考えている。先月、大型客船が来航した大黒ふ頭と横浜駅西口をつなぐシャ

トルバスが運行され、多くの外国人の方が来街された。交通手段が整えば多くの方が横浜駅に来ていただけると考えており、これからも継続的にシャトルバス等の運行をお願いしたい。横浜市都心臨海部再生マスタープランにおいても、新たな交通の導入や交通手段の強化・拡充といった政策が位置付けられている。回遊性を高める交通インフラの整備の推進もお願いしたい。2019年ラグビーワールドカップ、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、民間事業者としては魅力あるコンテンツを揃え、外国人旅行客をはじめ、多くの来街者の受け入れ体制を充実させていきたいと考えている。

行政においては、交通インフラの他にも、バリアフリー、Wi-Fi、規制緩和制度等の整備推進に尽力をお願いしたい。

○平原委員（横浜市 副市長）

公共空間を活用した維持管理のための収入源の確保については、国の流れとしてもそのような方向になっていることは事実である。本市でも、Park-PFI等ができないか事業者からの提案を受けているところである。こうした内容や事例も捉えながら、勉強していきたいと考えている。

指摘のとおり、回遊性を高める様々な交通の整備は必要と考えている。現実的には、横浜駅からみなとみらいを通り、山下公園までつなぐ連節バスを導入すべきと考えており、今年度、車両の購入費を確保したところである。また、民間からも色々な交通網の提案をもらっているところであり、多彩な交通を積極的に整備し、横浜駅周辺を含めた都心部全体が更にはぎわうように取り組んでいく。

○平野委員（東日本旅客鉄道株式会社 常務執行役員 総合企画本部副本部長）

現在、横浜駅西口開発ビルの工事につき、ご迷惑をおかけしているが、まずは御礼を申し上げる。

資料1の15ページ、16ページにビルの完成時のイメージが表示されているが、順調に工事が進行している。また、馬の背部分の通路については、仮通路ではあるが開通し、多くの方が通行されているため、中央通路の幅員が少なくなっていると思う。完成時には、現在の仮の5m程度の幅員が10m程度に広がるため、多くの通行が期待できると思っている。

長期間にわたり、通路の切替え等で多大な迷惑をかけているが、引き続き安全に留意して工事を進めていく。

駅前棟については、地上21階レベルまで鉄骨が立ち上がっており、夏頃には最上階まで達する見込みである。鶴屋町棟も駅前棟と同時に開業する予定である。歩行者デッキの整備に関して横浜駅きた西口鶴屋地区市街地再開発事業との連携も必要となる。

着実に工事を進めていきたいと考えている。今後とも、協力をお願いしたい。

○平野委員（西区 第五地区自治会連合会 会長）

西区の第五地区は、高島町や南幸、北幸を抱えており、平成16年の台風による浸水、洪水により大変被害を被ったため、治水対策について伺う。

資料2で説明のあった雨水幹線の整備について、岡野公園に立て坑を造るに当たっては、既に住民から意見も出ているため、地元住民の意見を十分に聞いて進めてほしい。

資料1の26ページで治水対策について示されているが、後ほどでも良いので教えてほしい。まず、内水について、開発にあわせた敷地内貯留により、10年に1度の確率の安全度から50年に1度の安全度まで高めていくということだが、この具体的な数字を達成するための敷地内貯留の量はどのくらいなのか。敷地内貯留については公的な規制や指導ができるものなのか。ダイエーや東急ハンズ跡地の建替えについてはどうなのだろうか。また、27ページに挙げられている河口部の河川改修や開発に合わせた橋梁架け替えについて、どの程度の話があり、どこまで検討、調整が進んでいるのか。

○事務局（池本理事（横浜市都市整備局 横浜駅周辺等担当理事））

岡野公園の立て坑の件については、事業を所管する環境創造局にしっかり伝えていく。

内水対策における敷地内貯留については、制度の中身の話にもなるため、後日時間を取って説明させていただく。

開発に合わせた橋梁の架け替えについては、京浜急行電鉄に協力いただき、東口の開発に合わせてどのような方法で架け替えができるかということ既に相談を始めている。鉄道が関係し、様々な問題があるためすぐにはいかないが、着実に進めていきたい。

○大島委員（神奈川県県土整備局 河川下水道部長）

河口部の改修については、現在川幅が約50mのところを約130mに広げる計画である。現在、JRに委託をし、工事の設計を進めているところである。施工計画も含めて検討をお願いしている。そういった検討が済んだ後に事業化となるが、100億円を超えるような莫大な費用がかかる事業となる。そのため、時期は明言できないが、まずは設計をしっかり進めていく。

○中山委員（幸栄地区 横浜駅西口地区市街地再開発準備組合 理事長）

エキサイトよこはま22の検討が始まった際に大きな事業として西口駅ビルの建替えが挙げられていた。東日本大震災もあり、事業を進めていくことになった中、地盤面はT.P. +2.6m以上で進めようということになった。それを踏まえて周辺の街区においても準じて嵩上げをしようとなったが、一つ大きな問題は、周辺の幹線道路においても、その地盤が低いことで地盤嵩上げた開発地と擦りつかない。岡野交差点はT.P. +0.3m、その先に進んでもT.P. +0.7m、北幸でT.P. +0.8mという数値になっているため、こういった場所が池になってしまう。

橋梁の架け替えに取り組むと書いてあるが、橋の桁下がどのくらいの位置にあって、法的にも対応が必要かどうかなども含め、一つ一つの橋の名称を書いておいていただきたい。いつ架け替えるとかではなく、一番必要なところから対応していく必要がある。

今は内水を新田間川にかなりそのまま流している状態である。ポンプ場は汚水を浄化する場所ではなく、単に汚水を川に流している。河川に親水性を持たせると言っている中、

この状態をどうにかしないと問題である。また、河川をきれいにするには浚渫が必要であるが、橋梁が低く、浚渫船が入ってこれない状況である。これは大きな問題で一朝一夕には対応できないが、エキサイトよこはま22は、絶えず良い方向に進むように問題を明確にして将来につなげていくものであるため、こういったことも記載しておく必要がある。

横浜市は、ここ40年の間に約60%もの緑が減少した。平成23年からみどり税を導入したにもかかわらず、よけいにみどりが少なくなっている。横浜駅西口駅前の図面上にも緑が1本もない。みなみ西口に植樹をしたとの説明があったが、これは植樹ではない。既存の高木を枯れていないにもかかわらず切ってしまったのである。そのうえ、植えた木は落葉樹の4本だけであり、緑の面積としては10分の1以下になってしまった。何かをやるというだけではなく、既存のものも大切に使うしてほしいし、増やしてほしい。

災害に一番必要なことは、現在自分が置かれている立場を把握することが必要である。Wi-Fiなどの通信では、なかなか歩行者にはわからない。できることなら、道路上に現在の海拔を目に見える形で表示してほしい。そうすることにより、歩行者に印象付けることができ、避難方向なども意識することになると思う。

○事務局（池本理事（横浜市都市整備局 横浜駅周辺等担当理事））

横浜駅周辺については、地盤が低いところが多いことは認識している。一度で地盤を目標高さまで上げることは難しいため、まちづくりガイドラインでもT.P. +1.0m、T.P. +2.3m、T.P. +3.1mと段階的に上げていくこととなっている。このまちづくりガイドラインに基づき、個々の開発等に合わせて少しずつ嵩上げを推進していきたい。

低い橋が多くあることも認識しているが、資料にそれら全ての橋を明記すると資料自体が見にくくなるおそれもある。意見の趣旨を踏まえた表現を考えたいと思う。

下水道の合流地区については、雨水と汚水を一緒に流して基本的には処理場に持っていく。非常に雨水が多く、汚水が薄くなりそれ以上の処理が難しい場合には、一部河川に流すこともあるようだが、合流式の改善点を検討し、取り組んでいくことが大事だと考えている。

緑についても、開発等に合わせて充実を図っていきたい。

海拔表示については大事なことであり、ハザードマップによる啓発なども大事だと考えている。有効な表示方法など、取組について考えたい。

○中山委員（横浜駅きた西口鶴屋地区市街地再開発組合 理事長）

8年前の5月に横浜駅きた西口鶴屋地区市街地再開発準備組合を立ち上げ、昨年10月によろやく「準備」を取ることができた。現在は、権利変換計画の申請に向けて準備をしているところである。ここまでに至ったことは、ここにお集まりの皆様の協力のおかげだと思っている。

準備組合発足時には、こんなにも長い期間がかかるとは思っていなかった。これだけかかった原因は、国家戦略特区ということもあり当初予定していなかった環境アセスメントが必要になったことが挙げられる。この8年間を振り返ってみると、100回程度は理事会や

総会を重ねてきた。事務局は大変苦勞をしてきた。そうした中で市街地再開発事業の中心人物が横浜市であることが最近になって分かってきた。行政間にも垣根があることを再認識した次第である。

横浜市の観光地図は、必ず長方形とレイアウトが決まっている。その地図の中では、横浜駅西口は左の一番隅に位置している。新横浜と本牧と金沢は下の方に小さな枠で記載されている。この地図の表現では、横浜駅は観光の対象ではないと捉えられる。みなとみらいに力を入れているのはわかるが、横浜駅にも役割を持たせないと他地区との競争に勝っていくことは難しい。中央西口及びきた西口の狭い広場においても、横浜市として十分力を入れて考えていることはわかったが、先行する西口開発ビルにどのようなテナントが入るのかは気になっている。どこにでもあるようなテナントではなく、目玉となるようなテナントが入るのかどうかを聞きたいと思っている。いずれは横浜駅が1枚の観光マップになることを期待したい。

○平野委員（東日本旅客鉄道株式会社 常務執行役員 総合企画本部副本部長）

西口開発ビルのリーシングについてはまだ調整中の段階である。しかるべき時期に明らかにしていく。

○平原委員（横浜市 副市長）

本日は、色々な貴重な意見をいただいた。それらをしっかりと受け止めて、今後の展開につなげていきたいと考えている。

本日の議論のまとめということで、コーディネーターや先生方に一言ずついただきたい。

○中村コーディネーター（独立行政法人都市再生機構 東日本都市再生本部事業推進部 担当部長）

民間開発、基盤整備、エリアマネジメントの取組など、様々な事業が目に見える形で一歩ずつ着実に進んでいることを、改めて実感した。鶴屋橋の開通により新たなエリアマネジメントの活動が発生するなど、良い循環も生じてきている。2020年までの目標と、その後10年の目標に向けた課題もまだまだ多いが、その課題解決と目標達成のためには、より一層の関係者間の連携や議論が重要になる。UR都市機構としても、計画の実現に向け、横浜市をはじめ、皆様方と共に努力していきたいと考えている。

○北山委員（法政大学教授 アーバンデザイン部会部会長）

横浜国立大学で教諭をやっていた関係でアーバンデザイン部会の部会長をやってきた。アーバンデザイン部会では、駅前の事業者の方の話を伺いながら、利益を阻害するようなことをいつも提案していたため、とても嫌な部会長だったかと思う。一事業者としては最大の利益を求めていることはわかるが、都市というものは建物のネットワーク全体できているものであり、その建物ネットワーク全体をどうするかということが非常に重要である。また、横浜駅の最大の問題は、公共空間が圧倒的に不足しているということであり、

それを関係者各自が認識する必要があるのだが、事業者は自分の敷地の中で最大化しようとするため、その欲望をいかに公共に貢献する方向に持っていけるかということを考えていた。

都市は経済活動の場であるが、経済活動で食い尽くしてしまった都市を30年後、50年後の未来に残すわけにはいかない。未来のためには、今諦めなければならないこともあるし、今やらなければならないこともある。そういうつもりで話をしていた。

横浜に関係してから50年程度たつが、その間大きく状況が変わってきた。人口が縮減するような時代になり、開発型の都市計画ではない次の時代の都市の在り方を、思想を持って作らなければならない時代になっている。その思想がどこにあるのかということがまだ明確になっていない。横浜は東京の近傍にあるため、東京とは違うアイデンティティを持つ必要がある。海の近くにあり、港を中心として繁栄した都市であるということをどう生かしていくのかということを考えなくてはならない。そのためには、水が重要であり、交通の話をするのであれば絶対に水上交通の話が出なくてはならないが、本日も水上交通の話が出なかった。中国などのアーバンデザインは、テーマパークのような都市が多くできている。横浜をそのような都市にはしたくない。

150年かけて作ってきた横浜のアイデンティティをしっかりと持った都市になってほしいと思いながら、アーバンデザイン部会で色々提言をしたが、ほとんどそれが反映されることがないまま進んでしまい、力不足を感じながらアーバンデザイン部会の部会長を退任する。

○小林委員（横浜国立大学名誉教授 ガイドライン検討会会長）

エリアマネジメント協議会の会長から発言があったことは大変良かったと思っている。新しく組織ができ、新たに東西協力してエリアマネジメント活動がなされ始めたと感じた。

先ほどから発言があったが、活動には財源が必要になる。その財源をどこに求めるか。本日、国会の内閣委員会において、地域再生法の改正が議論された。内閣府が提案した地域再生エリアマネジメント負担金制度が委員会を通り、明日、参議院の本会議で成立する予定であり、6月1日付けで公布される。この制度は、エリアマネジメントに関係するエリア関係者のうち、負担する人と負担しない人がエリアに混在することは好ましくない、フリーライダーは許さないといった発想に基づいている。この制度を活用すると、エリアの全ての方から負担金を徴収し、それをエリアマネジメント活動に展開できる。そのような制度が新たにできた。内閣府としても、制度を作ったからには、色々なところで適用してほしい。ただし、若干ハードルがある。例えば、エリアマネジメント組織は法人化しなければならない。西口と東口が一体となった組織はまだ法人化していないため、法人化の議論をする必要がある。また、今回の負担金制度は、にぎわいの創出に向けて使える資金を負担金で賄うというものである。自主的な広告等で財源を確保するという仕組みはそのまま生きており、ぜひ積極的にやっていただきたいと思うが、合わせて、にぎわい創出のためのイベントなどのコストを賄える負担金制度ができたわけである。最初から大きな額を徴収するのではなく、例えば、東西併せてイベント活動を実施することに対してかかる

費用を計算し、それを全員で負担して盛り上げていく。そういった制度であるため、ぜひ活用を検討してほしい。この制度を活用するためには、市が条例を制定する必要があり、併せて計画を策定し、その計画を市が承認することにより活動が始められる。内閣府としては活用してほしいため、声をかけてもらえればいつでも説明に行くと言っていた。

エリアマネジメント活動を行うためには、併せて、空間の整備が必要である。先ほど、西口でライブをやったとの話があったが、ライブをやる空間の整備に対し、地域再生エリアマネジメント負担金制度を活用した地区には、内閣府が持っている 1,000 億円規模の交付金の中から補助金を出せる可能性もあるとのことで、そのような相談にも乗れるとのことであった。エリアマネジメントのための空間整備に必要な資金とエリアマネジメント活動を行うために必要な資金とがあるが、空間整備のための資金は公共側で負担し、活動するための資金は民間が負担する。エリアマネジメント活動を活性化する仕組みが生まれるため、ぜひそれを活用していただければと思う。

○平原委員（横浜市 副市長）

本日欠席の岸井委員からコメントをいただいているため、事務局から報告する。

○事務局（渡邊課長（横浜市都市整備局都心再生課 横浜駅周辺等担当課長））

岸井委員からのコメントを代読する。

「ラグビーワールドカップを迎える 2019 年、オリパラを迎える 2020 年は世界のメディアに対して情報発信する絶好の機会です。横浜&エキサイト 2 2 の情報を英語で積極的に発信することが必要だろうと思います。皆様によりしくお伝えください。」

5. その他

■ 総括

○小池委員（横浜市 都市整備局長）

何度かこの会議に出席しているが、毎回、地域の状況を踏まえた意見や色々な事業の進捗よくを踏まえた課題など、熱心に議論いただきありがたい。本日も、様々な課題や意見をいただいたが、我々としては、しっかりとそれらを受け止めて今後取り組んでいきたいと思っている。

このエキサイトよこはま 2 2 の取組が始まり、ちょうど 10 年を迎えることになる中、先ほどあったスケジュールの説明において第 1 ステージ、第 2 ステージという話があったが、リーディングプロジェクトである西口開発ビル、きた西口鶴屋地区の再開発、西口駅前広場整備、馬の背解消といった第 1 ステージの事業がようやく見えてきたという状況である。

その後は第 2 ステージということで、みなとみらい 2 1 地区の話も絡めて、東口の方の話もあった。みなとみらい 2 1 地区については、本格利用が 83%まで達しており、暫定も含めると 90%まで土地利用が進んでいる。そもそも、みなとみらい 2 1 地区は、都心を一体化して都心全体を強化する目的で事業を進めてきたため、みなとみらい 2 1 地区の完成に合わせ、この横浜駅周辺もしっかり取り組んでいかなければならない。特に東口は、横

浜駅とみなとみらい地区の結節点になるため、改めて、しっかり取り組んでいきたいと思う。今後、本日出席の皆様の力添えをいただきながら、精一杯頑張っていこうと思う。

挨拶のようになったが、総括とさせていただく。

■ 北山委員退任の挨拶

○北山委員（法政大学教授 アーバンデザイン部会部会長）

自分が横浜国立大学に入学したのが50年前の話になる。ちょうど高度成長期の終わり頃に日本が世界第2位の経済大国になった時に横浜市は6大事業を進めていた。この6大事業は当時の企画調整局が進めており、都市デザインを中心として都市を作っていく、都市経営を進めていくということが行われていた。横浜国立大学に入学すると、横浜市の都市デザイン室の方の講義を受講するなど、大学の中では都市デザインを中心とした教育を受けていた。その際、小林委員が若手の助教授として赴任され、最初の授業を受講していた。都市というのは非常に重要な概念であるということを読みながら勉強してきた。大学を卒業してからしばらくして大学に呼び戻され、教え始めた。その時の都市デザイン室の室長と一緒に横浜のまちづくりに関するワークショップなど、色々提案をしながら、まちを作っていく検討をずっとやっていた。80年代の終わりの頃の話になる。その時に室長の考えていたことは、成長型、開発型の都市ではない、次の都市づくりをどうするかということであり、下から立ち上がってくるようなまちづくりであった。室長は横浜をとっても愛し、室長を中心とした横浜の都市デザインはかなりの力を持っていて、日本中で有名であり、世界の中でも賞をもらうなど、すごい都市であった。そういう意味でも横浜はプライドを持った都市であると思っている。

21世紀に入り、日本の人口が減衰していくという中で都市の新しい思想をどう作るか、都市戦略がととても大事になった中、横浜市は創造都市という方向で新しい都市の作り方をかなり先見的に始めたと思う。北仲通地区にあった重要な倉庫を壊してしまうなど、大事な資産を若干食い潰しながら、それでも創造都市という横浜の独自性を持って取り組んできたはずなのだが、ここしばらくはその力が弱まってきている気がしている。

自分自身が2年前に横浜国立大学を定年退職して法政大学に移り、それ以前はほとんど毎日のように横浜にいたのだが、横浜に来るのが年に数回になったという状態で横浜駅の動きも身近に感じられなくなったため、アーバンデザイン部会の部会長は適任ではないと思っており、退任させていただくことにした。

それでも、横浜はととても愛している都市であり、これからどうなるかをすごく期待している。東京にいと、横浜はまだ魅力的な街であると感ずるため、横浜らしさを忘れないような街を継続して作っていただきたいと思っている。

■ 野原委員新任の挨拶

○野原准教授（横浜国立大学）

アーバンデザイン部会の委員と西口駅前まちづくり検討会に参加している。

横浜国立大学から小林先生が退官された後に自分が都市計画の研究室に入り、今は准教

授をしているが、横浜国立大学で北山先生と色々なプロジェクトを進めてきたことや、先ほど北山先生からも紹介のあった元都市デザイン室長のもとで都市デザインを学んでいたということもあり、色々な縁の中で本日のこの場に参加させていただいていると思っている。

本日は、オブザーバーという立場で参加したが、これだけの方々が集まり、これだけの濃い情報が共有されているということはすごいなと思った。自分も横浜の知らない部分がたくさんあることを認識し、非常に勉強になった。これだけの方々が協力したエリアマネジメントやまちづくりができていけば、これほど強い街はないのではないかと。なかなかこれだけの方々が集まって一つの方向を見出していくということは、本当に貴重な機会ではないかと思っている。

横浜駅を見ていると、戦後 60 年代、80 年代、そしてエキサイトよこはま 22 とリズムがあり、次が 2020 年以降といった一つの方向性を作っていかなければならない大事なタームに来ているのではないかと思う。その中で皆様が色々な力を合わせながら、どうやってまちづくりを進めていくかという議論が引き続きできると嬉しく思う。

自分が北山先生のような憎まれ役などをどれだけできるかわからないところもあるが、自分なりに皆様と良い横浜を作っていきたい一員だと思っているため、引き続き、よろしくお願ひしたい。

6. 閉会

以上